

AIとの対話が変わえる塾の学び 「ググる」から「ジェネする」の時代へ



FLENS 株式会社
大生 隆洋 代表取締役社長

検索エンジンでは
自分が調べた情報以上の
情報にはアクセスできない

何かを調べたいときや疑問に思ったとき、「Google先生に聞いてみよう」や「ググる」といった言葉を使って検索エンジンで調べることが一般的になっています。現代は情報が大量に生産される「情報爆発」の時代であり、膨大なデータの中から必要な情報を効率的に探すため、Googleなどの検索エンジンを日々活用していると思います。「ググる」という言葉は、若者から年配の方まで幅広い世代で使われ、検索行為そのものを象徴する文化的な表現となり、社会的現象として定着しています。

する習慣は、現代社会で広く共有されているように感じます。

一方で、膨大な検索結果の中から適切な情報を選択するには、高いスキルと多くの時間が必要です。情報の真偽を精査する能力も求められます。検索ワードが的確でなく、欲しい情報を得るためにキーワードを何度も試行錯誤した経験がある方も多いのではないのでしょうか。また、情報の検索には適していますが、情報の整理や深い洞察には限界があり、その部分は自力で行う必要があります。当然、自分が調べた情報以上の情報にはアクセスできないという課題も隠れた問題として存在しています。

「まずは生成AIと対話してみる」

2022年12月にOpenAIが公開した「ChatGPT」は瞬く間に世界中にユーザーを広げました。わずか2年ほど前のことです。その後、テキスト生成にとどまらず、AIが画像や音声を生成するサービスが次々にリリースされ、生成AI（ジェネレーティブAI）が注目を集めています。広告の動画、音楽、ナレーションをすべて生成AIで作成するという話も日常的になりつつあります。

ChatGPTに代表されるテキスト生成AIでは、単に「ググる」と同じように検索すると誤った情報が表示されることもあります。考えたいことを人と対話するように入力してみると、様々な切り口で論点を整理することができます。自分がさらに深掘りしたい内容に疑問を感じた場合、さらに対話形式で質問を重ねると、より具体的な情報を得ることができます。その中で気になる情報があれば、従来の検索エンジンを活用して情報の正確性を確認することも可能です。生成AIを活用することで、「ググる」では不向きだった情報整理や課題解決に必要な深い洞察を得ることができるようになります。

今後、「わからないことがあったらまずはググる」から、「まずは生成AIと対話してみる」という「まずはジェネする」という現象が定着するのではないかと思います。

学習現場での活用には大きな可能性があると感じます。従来の先生への質問では、先生の時間を気にして、もっと質問したいのに途中で納得したり、先生に変に思われたくなくて質問を躊躇したりすることがあると思います。一方、「ジェネする」学習は、自分のペースで気兼ねなく、好奇心の赴くまま質問できるので、納得いくまでとことん対話することができます。こうした環境において、講師の役割は、AIとの対話をサポートし、疑問をどう問いかけるかを子どもと一緒に考えることになるかもしれません。

「ジェネする」は、自分で考えるきっかけを与えてくれる可能性も大いにあります。